

# 琉球大学学術リポジトリ

## 上腕骨近位端骨折の手術成績： 順行性髄内釘とロッキングプレートの比較

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2019-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Goya, Isoya, 呉屋, 五十八 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/44107">http://hdl.handle.net/20.500.12000/44107</a>

(別紙様式第7号)

## 論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	呉屋 五七し
論文審査委員	審査日	平成31年3月4日	
	主査教授	二宮賢司	
	副査教授	高山 千利	
	副査教授	國吉 幸男	
(論文題目)			
Surgical outcomes of displaced proximal humeral fractures: antegrade intramedullary nail versus locking plate (上腕骨近位端骨折の手術成績：順行性髓内釘とロッキングプレートの比較)			
(論文審査結果の要旨)			
<p>【目的】 上腕骨近位端骨折は高齢者における上肢骨折の中で2番目に頻度の高い骨折である。上腕骨近位端骨折に対する手術治療の主な固定材料としては順行性髓内釘およびロッキングプレートがあるが、日本ではその術後成績を比較した大規模な研究はなく、国際的にも少数の報告があるのみである。本研究の目的は、上腕骨近位端骨折に対して順行性髓内釘およびロッキングプレートで手術治療を行った症例の、術後成績を比較検討することである。</p> <p>【対象と方法】 対象は2008年から2016年まで上腕骨近位端骨折に対して手術を行った108例、順行性髓内釘(以下、N群)54例、ロッキングプレート(以下、P群)54例を2-part骨折と3・4-part骨折に分けて比較した。内訳はN群は男性11例、女性43例、うち2-part骨折は手術時平均年齢67歳(35~91歳)、平均経過観察期間18カ月(12~78カ月)、3・4-part骨折は手術時平均年齢70歳(46~85歳)、平均経過観察期間18カ月(12~64カ月)であった。P群は男性15例、女性39例、うち2-part骨折は手術時平均年齢66歳(21~87歳)、平均経過観察期間19カ月(12~48カ月)、3・4-part骨折は手術時平均年齢61歳(20~83歳)、平均経過観察期間23カ月(12~114カ月)であった。調査項目は肩関節自動可動域(屈曲、外旋)、手術時間、術中出血量、および術後合併症とした。また肩関節自動可動域(屈曲、外旋)は年代別比較(65歳未満群、前期高齢群、後期高齢群)も行った。統計学的検討はKruskal-Wallis test、Mann-Whitney U testおよびFisher exact testを用い危険率5%未満を有意差ありとした。</p> <p>【結果】 手術時間や術中出血量に有意差は認めなかった。2-part骨折の外旋はN群がP群より有意に良好であった。年齢別比較では3・4-part骨折の前期高齢群での外旋で、N群はP群より有意に良好であった。N群およびP群での年齢別比較では、N群では屈曲は2-part骨折の65歳未満群が前期高齢群および後期高齢群より有意に良好で、3・4-part骨折の前期高齢群が後期高齢群より有意に良好であった。外旋は2-part骨折および3・4-part骨折の前期高齢群が後期高齢群より有意に良好であった。P群では屈曲は3・4-part骨折の65歳未満群は後期高齢群より有意に良好で、外旋は3・4-part骨折の65歳未満群は他の2群より有意に良好であった。術後合併症では、骨頭圧潰は3・4-part骨折で13例と3・4-part骨折に起こりやすい傾向を認めた。内反変形は2-part骨折のP群で4例と起こりやすい傾向を認めた。</p> <p>【結語】 N群とP群の術後成績(屈曲・外旋、手術時間、術中出血量)はほぼ同等の結果だったが、2-part骨折の自動外旋はN群がP群より有意に良好であった。また高齢になると自動可動域は悪い傾向にあった。骨頭圧潰は2-part骨折より3・4-part骨折で有意に多かった。</p>			

- 備考 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。  
 2 要旨は800字~1200字以内にまとめること。  
 3 \*印は記入しないこと。